

はじめに

本書は、二〇二四年六月八日に中部大学・京都先端科学大学の共催で開催されたオンライン・シンポジウム「リベラルアーツと芸術」をもとに編纂されたものです。中部大学「創造的リベラルアーツセンター」はこれまでに同様の本として『リベラルアーツと外国語』（二〇二二年）、『リベラルアーツと自然科学』（二〇二三年）、『リベラルアーツと民主主義』（二〇二四年）を刊行しましたが、この三部作（センター準備期の『21世紀のリベラルアーツ』（二〇二〇年）も含めると四部作）をもって、私どもは一つの区切りを終えることができたと考えておりました。ところで今回より京都先端科学大学との共催によるシンポジウム開催が実現し、また本の装丁の一新も叶いましたので、ここからまた新たなシリーズが始まるものとお考えいただければ幸

い
です。

本書は、第一部が当日のシンポジウムの記録、第二部がテーマに関する九名の執筆者によるエッセイという構成になっています。

シンポジウムではこれまでも毎回、各界の第一線で活躍中のパネリストをお迎えしてきましたが、今回もこのテーマを取り上げるのにこれ以上は望めないと言える素晴らしい顔ぶれにお集まりいただくことができました。また、これまでのシンポジウムと同様に、今回のシンポジウムにも大学関係者だけでなく、教育研究関係者、マスコミ・出版関係者、とりわけ学生の皆さん、一般参加者の皆さんなど、多数の方々にご視聴いただきました。当日は、ご質問もいろいろと出されましたし、シンポジウム終了後にも多くの方からご感想をお寄せいただきましたが、いずれも、第一部の各パネリストの発表や相互のやり取りを熱心に視聴して下さったことがうかがえるものばかりで、主催者の一人としてたいへん嬉しく、またありがたく思っております。

少子化ほかによる大学の淘汰が進む中で、各大学の教育内容が厳しく問われる昨今ですが、リベラルアーツ教育についても例外ではなく、さまざまな議論、多様な見方が並存しているというのが実態かと思われま
す。今回は芸術との関係を問い直すのがおもな趣旨でしたが、以下で繰り広げられている議論が、いわゆる芸術系の教育研究に携わっている方々だけでなく、こ

れからの大学において「学ぶ」とはどういうことか、また生涯を通じて「考える」とはどういうことかについて関心を抱くすべての方々の何かしら助けになるものであることを心より願っております。

鈴木順子